
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 子規《しき》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 近頃 | 不圖《ふと》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号)
(例) [# 「插」でつくりの縦棒が下に突き抜けている、第4水準2-13-28]

/ \：二倍の踊り字(「く」を縦に長くしたような形の繰り返し記号)
(例) わざ / \

余は子規《しき》の描《か》いた畫《ゑ》をたつた一枚持つてゐる。亡友の記念《かたみ》だと思つて長い間それを袋の中に入れて仕舞つて置いた。年數《ねんすう》の經《た》つに伴《つ》れて、ある時は丸《まる》で袋の所在を忘れて打ち過ぎる事も多かつた。近頃 | 不圖《ふと》思ひ出して、あゝして置いては轉宅の際などに何處へ散逸するかも知れないから、今のうちに表具屋へ遣《や》つて懸物《かけもの》にでも仕立てさせやうと云ふ氣が起つた。澁紙の袋を引き出して塵を拂《はた》いて中を檢《しら》べると、畫は元の儘 | 濕《しめ》つぽく四折《よつをり》に疊んであつた。畫の外に、無いと思つた子規の手紙も幾通か出て來た。余は其中《そのうち》から子規が余に宛てゝ寄こした最後のものと、夫《それ》から年月の分らない短いものを選び出して、其中間に例の畫を挟んで、三を一纏《ひとまと》めに表装させた。

畫は一輪花瓶《いちりんざし》に [# 「插」でつくりの縦棒が下に突き抜けている、第4水準2-13-28] した東菊《あづまぎく》で、圖柄《づがら》としては極めて單簡《たんかん》な者である。傍《わき》に「是は萎《しほ》み掛《か》けた所と思ひ玉へ。下手《まづ》いのは病氣の所爲《せゐ》だと思ひ玉へ。噓だと思はゞ肱を突いて描《か》いて見玉へ」といふ註釋が加へてある所を以て見ると、自分でもさう旨いとは考へて居なかつたのだらう。子規が此畫を描《か》いた時は、余はもう東京には居なかつた。彼は此畫に、東菊《あづまぎく》活けて置きけり火の國に住みける君の歸り來るがねと云ふ一首の歌を添へて、熊本返送つて來たのである。

壁に懸けて眺めて見ると如何にも淋《さび》しい感じがする。色は花と莖と葉と硝子《ガラス》の瓶とを合せて僅に三色《みいろ》しか使つてない。花は開いたのが一輪に蕾《つぼみ》が二つだけである。葉の數を勘定して見たら、凡《すべ》てゞやつと九枚あつた。夫《それ》に周圍が白いのと、表装の絹地が寒い藍なので、どう眺めても冷たい心持が襲つて來てならない。

子規は此 | 簡單《かんたん》な草花を描《ゑ》くために、非常な努力を惜しまなかつた様に見える。僅か三莖《みくき》の花に、少くとも五六時間の手間《てま》を掛けて、何處から何處迄丹念に塗り上げてゐる。是程の骨折は、たゞに病中の根氣仕事として餘程の決心を要するのみならず、如何にも無雜作に俳句や歌を作り上げる彼の性情から云つても、明かな矛盾である。思ふに畫と云ふ事に初心《しよしん》な彼は當時繪畫に於ける寫生の必要を不折《ふせつ》などから聞いて、それを一草一花の上にも實行しやうと企《くはだ》てながら、彼が俳句の上で既に悟入した同一方法を、此方面に向つて適用する事を忘れたか、又は適用する腕がなかつたのであらう。

東菊《あづまぎく》によつて代表された子規の畫は、拙《まづ》くて且《かつ》眞面目である。才を呵《か》して直ちに章をなす彼の文筆が、繪の具皿に浸《ひたる》ると同時に、忽ち堅くなつて、穂先の運行がねつとり竦《すく》んで仕舞つたのかと思ふと、余は微笑を禁じ得ないのである。虚子《きよし》が來て此幅《このふく》を見た時、正岡の繪は旨いぢやありませんかと云つたことがある。余は其時、だつてあれ丈《だけ》の單純な平凡な特色を出すのに、あの位時間と努力を費さなければならなかつたかと思ふと、何だか正岡の頭と手が、入らざる働きを餘儀なくされた觀がある所に、隠し切れない拙《せつ》が溢《あふ》れてゐると思ふと答へた。馬鹿律氣《ばかりちぎ》なものに厭味《いやみ》も利《き》いた風もあり様はない。其處に重厚な好所《かうしよ》があるとすれば、子規の畫は正に働きのない愚直ものゝ旨さである。けれども一線一畫の瞬間作用で、優に始末をつけられべき特長を、咄嗟《とつさ》に辨ずる手際がない爲めに、已《やむ》を得《え》ず省略の捷徑《せふけい》を棄てゝ、几帳面な塗抹主義を根氣に實行したとすれば、拙《せつ》の一字は何うしても免れ難い。

子規は人間として、又文學者として、最も「拙《せつ》」の缺乏した男であつた。永年《ながねん》彼と交際をした何《ど》の月にも、何《ど》の日にも、余は未だ曾て彼の拙《せつ》を笑ひ得るの機會を捉《とら》へ得《え》た試《ためし》がない。又彼の拙に惚れ込んだ瞬間の場合さへ有《も》たなかつた。彼の歿後殆ど十年にならうとする今日《こんにち》、彼のわざ／＼余の爲に拙《ゑが》いた一輪の東菊《あづまぎく》の中《うち》に、確に此一拙字を認める事の出來たのは、其結果が余をして失笑せしむると、感服せしむるとに論なく、余に取つては多大の興味がある。たゞ畫が如何にも淋《さび》しい。出來得るならば、子規の此拙な所をもう少し雄大に發揮させて、淋《さび》しさの償《つぐなひ》としたかつた。

[# 地から2字上げ] 明治四四、七、四

底本：「漱石全集 第十七巻」岩波書店
1957（昭和32）年1月12日第1刷発行
1979（昭和54）年8月8日第4刷

入力：山田豊

校正：土屋隆

2005年9月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。